

信行要文 ②

第十一回 法華講夏期講習会 第二期

（平成二十六年五月二十五日）

皆さん、おはようございます。

本年度夏期講習会の第二期に当たりまして、皆様方には深信^{じんしん}の登山、まことに御苦労さまでございます。恒例により「信行要文」についてお話をさせていただきたいと思えます。

本日は、テキスト四ページの六番目『上野殿御返事』から講義をしていきますので、よろしく願いいたします。

6 上野殿御返事

無量義經に云はく「四十余年未だ真実を顕はさず」と。法華經に云はく「世尊は法久しくして後要^{のちかなら}ず^{まさ}当に真実を説きたまふべし」と。多宝仏は「皆是真実なり」とて、法華經にかぎりて即身成仏ありとさだめ給へり。爾前經にいかやうに成仏ありともとけ、権宗^{ごんしゅう}の人々無量にいひくるふとも、たゞほうろく千につち一つなるべし。「法華折伏破権門理^{はごんもんり}」とはこれなり。（御書一三五九^{ごん}一三行目）

この御文は、上野殿に差し上げた御書の一文であります。

上野殿とは、南条時光殿のことです。ここ総本山がある所は、静岡県富士宮市上条ですが、昔は富士郡上野村とっておりました。今は上野という地名が住所から取られてしまいましたが、上野小学校や上野中学校など、名残は色々なところにあります。南条時光殿は、ここ上野に住んでおられましたので、土地の名前を取って、上野殿と称したのであります。

これは世間でも、よく土地の名前を取って、日暮里^{にっぽり}のおじさんとか高田馬場のおばさんなどと言うでしょう。それと同じで、大聖人様も南条時光殿のことを上野殿と称されていたのであります。

本抄は、弘安二（一二七九）年四月二十日、日蓮大聖人様が御年五十八歳の時の御書であります。

本抄では、初めに竜口の頸^{たつのくち}の座と、東条小松原の難を挙げられまして、刀杖^{とうじょう}の難に値われたことを述べられております。そのようなところから、本抄を別名『刀杖難事』とか『杖木書』と称されております。

その対告衆は上野殿ですが、正規の名前は南条兵衛七郎次郎^{ひょうえ}平時光^{たいらの}と言ひ、

法名を大^{だいぎょう}行^{ぎょう}と言うのであります。毎年、総本山でも南条時光殿の祥月命日に当たる五月一日に大^え行^{ぎょう}会^えを修して、お墓参りもしております。

この南条時光殿は、大聖人様御在世当時の御信者であり、総本山大石寺の土地を御供養してくださった、総本山の開基檀那でもあります。また、当時の上野郷の地頭であったことから、先程も申しましたように、地名を取って上野殿と称したのであります。

南条時光殿のお父さんの名前は南条兵衛七郎で、法名は^{ぎょうぞう}行^{ぎょう}増^{ぞう}と言います。その次男であったので、南条時光殿のことを南条兵衛七郎次郎と言うのです。その時光殿にはお兄さんがおられまして、十八歳の時に水死してしまうのでありますが、この方の名前は南条兵衛七郎太郎と言うのです。昔は、このような名前の付け方をしておりまして、長男であれば太郎、次男であれば次郎と、このように呼ばれていたのであります。そして、お兄さんが亡くなりましたので、時光殿は若くして地頭職を継いだのであります。

ちなみに、一番上のお姉さんは蓮阿尼と言ひ、伊豆の仁^に田^だ郡^{ぐん}（現在の静岡県函南町）の新田五郎重^{しげつな}綱^{とつ}に嫁ぐのでありますが、この長姉の子供がのちに第三祖日目上人とられます。そして、もう一人の姉は、富士郡^{おもす}重^{おも}須^す（現在の富士宮市北山）の地頭であった石川新兵衛宗忠^{むねただ}に嫁いでいるのであります。

時光殿は、幼い時から大聖人様に帰依するとともに、日興上人^{しけい}を師兄と仰いで、純真な信心に励んでおりました。特に熱原法難の時には信者の中心者として活躍し、多くの僧俗が迫害に値うなか、それらの僧俗を護って外護の任を果たした方であります。

御書のなかには、南条時光殿のことを「上野賢人」（御書一四二八頁）と称賛され、大聖人様から大きな信頼を受けていた方であります。「賢人」という称号を頂戴したくらいですから、まさに信心強盛^{ごうじょう}で、多くの方々に慕^{した}われていた方であったことが窺^{うかが}い知れるのであります。

また、奥さんは妙蓮と言ひ、時光殿と共に数多くの御供養を大聖人様に尽くされております。そして、熱原法難のあと、幕府による弾圧が^{きゅうぼう}続^つく窮^{きゆう}乏^{ぼう}のなかで、九男四女の子供を育てられたのであります。

時光殿はまた、波木井実長^{はきりさねなが}の謗法により、日興上人が身延を離山された時も、日興上人を上野の地にお迎えし、そして大石寺開創の基礎を作りました。さらに、大法流布のために権力や迫害にも屈せず、純真な信心を貫いた方でありまして、信徒の鑑^{かがみ}と言われております。そのことは、大聖人様から三十数通もの御書を頂戴していることから判るのであります。

さて、ただいま拝読した御書の内容を見ますと、まず初めに、大聖人様がこれまで値われた法難のなかで、竜口の法難と東条小松原の法難ほどの大難はないと仰せです。それは、色々な難を受けたなかでも命を捨てるほどの大難は、ほかにはなかったからである、と仰せられているのです。

竜口の法難とは、皆さんもよく御承知のことと思いますが、文永八（一二七一）年九

月十二日に、大聖人様が鎌倉の竜口で頸の座に座らされ、斬首刑に処せられようとした事件であります。

その竜口の法難は、大聖人様と極楽寺良観とが、祈雨の勝負をしたことが発端です。この祈雨の勝負で、良観が一生懸命に雨を降らそうとするけれども、一向に雨は降らず、ただ単に涙と汗のみを流して、結局、良観は勝負に負けてしまうわけです。それを恨みに思った良観が、様々な策謀さくぼう くわだを企て、大聖人様を亡き者にしようとしたことが、竜口の法難の発端であります。

つまり、ずる賢い良観が、幕府の要人やその奥さん方に取り入って、様々に悪巧みわるだくをするのであります。そしてこれを受けて、平左衛門尉頼綱よりつなが武装した数百人の兵を連れて大聖人様がおられる松葉ヶ谷まつばの草庵そうあんを襲い、大聖人様を捕えたのであります。この時、同行した平左衛門の家臣である少輔房しょうぼうという者が、大聖人様の懐中から法華経の第五の巻を奪い取り、大聖人様の頭こうべを打ち据えたのであります。

この第五の巻のなかには勸持品第十三が入っておりまして、そこには末法の法華経の行者が三類の強敵ごうてきに値われるということが予証されているのです。

今の法華経の多くは冊子本さつしになっておりますが、大聖人様御所持の法華経は、卷子本かんすと言いまして、巻物だったのであります。法華経は全部で八巻あるのですが、そのうちの第五の巻に勸持品が入っており、この第五の巻をもって大聖人様の頭を打ち据えたのであります。

大聖人様は、

「うつ杖も第五の巻、うたるべしと云ふ経文も五の巻、不思議なる未来記の経文なり」
(御書 一三六〇頁)

と仰せのように、末法の法華経の行者が三類の強敵の難に値うということを示された勸持品の巻軸で頭を打たれたことによって、大聖人様は身をもって法華経の経文を実証されたのであります。したがって大聖人様は、この難によって、まさしく法華経しんどうくを身読した、身体で読んだとおっしゃっているのであります。

さて、松葉ヶ谷の草庵で逮捕された大聖人様は、一時、北条宣時の屋敷のぶときに預けられ、なんの取り調べもないまま、深夜、隠密裏に竜口の刑場へ連れ出されたのであります。

その途中、大聖人様は鶴岡八幡宮の前で行列を止めさせ、八幡大菩薩に対して「法華経しつせきの行者を守ると誓っているのにもかかわらず、何故、この日蓮を守らないのか」と叱責されました。このことにより、のちに竜口の刑場で、法華経の行者である大聖人様を諸天善神がお守りすることになるのであります。

また、大聖人様は四条金吾のもとへ使いの者を走らせて、事の次第を伝えさせました。それを聞いた四条金吾は驚いて、裸足はだしのまま駆けつけ、大聖人様の馬のくつわに取りすがり、決死の覚悟で刑場までお供をしたのであります。

竜口に着かれた大聖人様を頸の座に据えて、太刀取りがまさに大聖人様の頸はを刎ねん

とした時に、江ノ島のほうから不思議な光り物が現れ、太刀取りの目はくらみ、そのほかの兵士達も皆、恐れおののいて、刀を捨てて逃げ伏し、大聖人様を斬ることはできなかったのであります。

この時に現れた光り物について、大聖人様は、

「三光天子の中に月天子は^{ひかりもの}光物とあらはれ^{たつのくち}竜口の頸を^助たすけ云云」(同 四七九^〇)と仰せであります。その「三光天子」とは太陽・月・星の三つですが、これらが法華経の行者を守っており、竜口の頸の座では月光天子、月の諸天善神が光り物となって現れて、法華経の行者を守護せられたのであります。

そののち、依智^{えち}(現在の神奈川県厚木市)にあった、佐渡の地頭・本間六郎左衛門の屋敷に預けられ、同年十月十日に依智^たを発って佐渡に向かわれました。

この竜口の法難は、御法門の上から非常に大事な意義があります。すなわち『開目抄』に、

「日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑^{ねうし}の時に頸は^{くび}ねられぬ。此^{これ}は^{こんぼく}魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へ^送をくれば、^怖をそろしくて^恐をそろしからず。みん人、^見いかに^怖をぢぬらむ」(同 五六三^〇)

とお示しのように、この時に大聖人様が^{ほっしやくけんぼん}発迹顕本されたことを述べられているのであります。

御文のなかの「魂魄」とは、^{く おんがんじょ じ じゅゆうしん}久遠元初自受用身としての魂魄であり、大聖人様はこの竜口の法難において、凡夫としての^{はら}迹を発って、久遠元初自受用身としての本仏の境地を顕されたのであります。その証拠が、ただいま拝読の「日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ」との御文であり、ここで大聖人様は凡夫の身の頸が刎ねられたとおっしゃっております。実際には、頸は刎ねられておりませんが、凡夫の身としての頸は「はねられぬ」とおっしゃっており、次の「此は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人、いかにをぢぬらむ」とは『開目抄』を^{したた}認められた理由を仰せになっているのであります。まさにそのようにして、大聖人様は発迹顕本をせられたということです。

もう一つの大難として、前にも挙げた『上野殿御返事』に「東条の難」とお示しになった、小松原の法難があります。

文永元(一二六四)年の秋に、母君が^{ははぎみ}危篤であるとの知らせを受けて、大聖人様は故郷の^{あわ}安房(現在の千葉県)にお帰りになるのであります。そして『可延定業御書』に、
「日蓮^{はは}悲母を^祈いのりて候ひしかば、^{げんしん}現身に病を^延いやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり」(同 七六〇^〇)

と仰せのように、大聖人様の御祈念によって病が快復し、四カ年の寿命を延べられたのであります。

そのあとも大聖人様は安房の地に留まって、妙法弘通に専念されていたのであります

が、大聖人様の帰郷を聞かれた、天津^{あまつ}の領主で、信者でもある工藤吉隆殿が、大聖人様をお招きしたいということでお願いに行き、大聖人様も諒^{りょう}とされて、工藤家へ行こうとした時に起きたのが小松原の法難であります。

大聖人様はその年の十一月十一日に、十人ばかりのお供を連れて、工藤殿の館に向かわれました。これを知った地頭の東条景信^{かげのぶ}、この者は熱心な念仏の信者で、大聖人様が清澄寺で「念仏は無間地獄の教えである」等と述べて立宗宣言あそばされたことで、烈火の如く怒り、大聖人様を亡き者にしようとしします。その時に大聖人様をお助けしたのが、兄弟子でもあった義浄房と浄顕房のお二人で、大聖人様は『本尊問答抄』のなかに、

「貴^怒辺は地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺をいでておはせし人なれば、何となくともこれを法華経の御奉公とおぼしめして、生死をはなれさせ給ふべし」（同一二八三^念）

と示され、立宗宣言の時に義浄房と浄顕房の助けによって東条景信の難を逃れることができたとおっしゃっております。

その東条景信が、またもや大聖人様を亡き者にしようと手勢を連れて、小松原で待ち伏せをするのです。そして、大聖人様一行が夕刻、小松原に差し掛かった時に、武器を持った兵士が数百人の念仏者を率いて、大勢で襲い掛かったのであります。その結果、弟子の鏡忍房が殺され。お二人が重傷を負うことになりました。また大聖人様御自身も、景信の太刀によって右の額に深手の傷を受けられ、さらに左手を折られるという、まさに命に及ぶ大難に値われたのです。この時に工藤吉隆殿も殉死したと言われております。

この時の様子について『南条兵衛七郎殿御書』には、

「十一月十一日、安房国東条の松原と申す大路にして、申酉の時、数百人の念仏等にまちかけられ候ひて、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものゝ要にあふものわづかに三四人なり。いるやはふるあめのごとし、うつつちはいなづまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は大事^手のてにて候。自身もきられ、打たれ、結句にて候ひし程に云云」（同 三二六^念）

と示されております。

さて、松葉ヶ谷の草庵において法華経の第五の巻で大聖人様を打擲^{ちようちやく}した少輔房について、大聖人様は「上野殿御返事」のなかで、

「ついには日蓮にあひて仏果をうべきか」（同 一三五九^念）

と仰せられ、妙法に結縁した因縁によって、結局は救われるであろうと御指南であります。

そして、逆縁成仏の例を同抄の前段に、

「天竺に嫉妬^{てんじく しつと}の女人あり。男をにくし故に、家内の物をことごとく打ちやぶり、其の上にあまりの腹立^{はらだち}にや、すがたけしきかわり、眼は日月の光のごとくかがやき、くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、年来男のよみ奉る法華経の

第五の巻をとり、両の足にてさむざむにふみける。其の後命つきて地獄にをづ。両の足ばかり地獄に入らず。獄卒鉄杖をもってうてどもいらず。是は法華經をふみし逆縁の功德による」(同 一三五八^ノ)

と仰せです。これは、女人が嫉妬に狂って、亭主が拝んでいた法華經を足蹴にしたことにより地獄に墮ちるのでありますが、その足蹴にした足だけが地獄のなかに入っていかなかったという話で、これを逆縁成仏と言います。

このことは私達の折伏にとっても、非常に大事なことであります。すなわち、逆縁だろうが順縁だろうが、しっかりと折伏していくということです。

とかく、我々凡夫の考えで、少し厄介な人には「折伏をしたってだめだよ」と言って、折伏をやめてしまいがちですが、そうではないのです。だれであっても、どんどん、どんどん折伏をしていくべきであります。

たとえその時に反対しても、必ず逆縁の成仏につながるのですから、どんなに怒り狂っていても構いません。相手に対して、しっかり「この御本尊でなければ、本当の幸せは掴めませんよ」と、はっきり言うのです。

我々の折伏は、順縁・逆縁の二縁を共に救うわけです。折伏して、すぐに解ってくださる方は順縁で、それはまことに結構でありますけれども、たとえ逆縁であっても必ず救えるのですから、多くの方々に妙法を下種結縁していくということが大事なのであります。自分の判断で「あの人はだめだ」と、けっして決めつけないでください。

これは前に何度も話したことですが、先年、台湾に行った時の市内見学で、故宮博物館に案内されました。そして、一通り見学が終わったあとに、副館長さんか出迎えてくださりまして、私と副館長さんとで少し立ち話をしました。

その話が終わったあとに、私は別の方と話をしておりますと、副館長さんと台湾の婦人部の方が、三人ぐらいで熱心に話をしておりましたので、私が「あの方々は何を話しているのですか」と聞きましたら、折伏をしていると言うのです。

私が別の方と話している間に、副館長さんを折伏しているというわけで、どんな時でも折伏を忘れない姿がありました。つまり、場所、時、だれかれを選ばず、チャンスがあれば折伏しているということで、それが今日の台湾のパワーになっているのではないかと思います。我々も、台湾の方から学んで、しっかり折伏をしていかなければいけないと思います。

本当にチャンスがあれば、相手がだれであろうと、堂々と折伏しているのです。私はその時に「折伏とは、こうでなければならない」ということを、台湾の婦人部の方に教えられました。

ただいまの御書に示されるように、法華經を足蹴にした女人でも逆縁成仏するのでありますから、このことを私達はよく知って、多くの人達に下種結縁していくことが極めて大事であります。

さて、この『上野殿御返事』では、法華經の第五の巻に納められている各品の内容と、その意義について述べられております。そのなかで、まず提婆達多品にある提婆達多と竜女の成仏について触れられて、

「逆順ともに成仏を期すべきなり。是提婆品の意なり」（同 一三六〇^ご）と仰せであります。

つまり、五濁乱漫の末法の衆生が救われる道理を、ここにおっしゃっているのです。下種することによって、必ずそれが縁となって成仏に結びつくのでありますから、逆縁も順縁も、共に成仏を期す大事な発端になるということでもあります。

次に、勸持品のなかで説かれている刀杖の難に関連して、過去の様々の聖人などの例を引かれ、法華經の第五の巻の勸持品を身口意の三業で読み、実践したのは、ただ日蓮一人であると断言せられているのであります。

さらに涌出品については、大聖人様こそ、上行菩薩のなすべき末法の妙法弘通を実践している、ただ一人の方であることをお述べになっているのであります。

以上、当抄の概略を申し述べました。

次に先程拝読した、テキストの第六番に挙げた御文について申し上げます。

初めに「無量義經に云はく『四十余年未だ真実を顕はさず』と」とありますが、この無量義經とは法華經の開經とされるお経で、徳行品・説法品・十功德品の三品から成っております。このうち「四十余年未だ真実を顕はさず」とは、説法品のなかで述べられている御文であります。

この文意は、釈尊の五十年の説法のうち、前の四十二年間の教えは方便権教であって、真実を顕さない教えであるということです。すなわち、釈尊をはじめとする三世十方の諸仏の出世の本懐は、一切衆生を化導して仏道を成就させることにあり、四十余年の経教は衆生を教化するために、仮りに方便として説かれたもので、仏の本意ではありません。釈尊の本意はあくまでも、のち八年の法華經を説くことにあるとおっしゃっているのであります。

御承知のように、家を建てる時には足代^{あししろ}といって、いわゆる足場を組みますが、この足代が爾前権教なのです。この足代は、家を建て始める時には必要ですが、家が建ってしまったならば、かえって不要なものであり、取り去らなければなりません。つまり、真実の教えである法華經が説かれたのちは、足代としての爾前権教は捨て去らなくてはならないのであります。

また、天台大師は、華嚴時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時の五時を説かれ、法華經が最も勝れていることを示されております。

初めの華嚴時とは、釈尊が伽耶城近くの菩提樹のもとで成道したのち、擬宜^{ぎぎ}すなわち衆生の機根を試すために二十一日間、華嚴經を説いた期間であります。

その次が阿含時で、衆生を仏法に誘引するために鹿野苑^{ろくやおん}などで十二年間、阿含經を説

かれた期間であります。

三番目が方等時で、^{だんか}彈呵すなわち小乗に執着することを恥ずかshめて大乘を慕^{した}わせるため、阿含時に続いて十六年間、様々な権大乘の教えを説いた期間であります。

四番目が般若時で、^{じゅほうせん}鷲峰山や^{びやくろち}白露池などの^え四処十六会で十四年間、衆生の機根を淘汰^{とうた}するために^{だいぼん}大品般若経などの教えを説いた期間であります。

そして最後、五番目に法華経が説かれます。釈尊は法華経を説くために、華嚴・阿含・方等・般若という長い時間を費やし、衆生を^{じょうきじょうよう}調機調養したのであります。つまり様々な機根の衆生がいますから、その機を調べ、機を養ってから、最後の八年間において法華経をお説きになったのであります。

また、天台大師は右の五時の内容を、牛の乳を精製する五つの過程、すなわち^{ごみ}五味に譬えております。まず最初の乳味とは牛乳のことで、次に^{らく}酪味とは、今で言いますとヨーグルトとかチーズのようなものです。そして^{しょうそ}生蘇味、^{じゅくそ}熟蘇味と段階を経て、最後は無上の味わいである^{だいが}醍醐味に至ると説かれております。その醍醐味の教えこそ法華経であるということで、その前の四十二年間にわたって説かれた経教は真実を顕すための方便であり、いまだ真実は説かれていないということです。

次に「^{ひき}法華経に云はく『^{のちかなら}世尊は法久しくして後^{まさ}要^{まさ}ず^{まさ}当に真実を説きたまふべし』と」とあります。これは法華経方便品第二に説かれている一文であります。天台大師は『法華文句』に、

「世尊法久後要当説真実とは即ち真を顕すなり」（学林版文句会本上五八二）と示されております。すなわち仏様が法を説くのは、一切衆生をことごとく成仏せしめることにあり、そのために四十二年間にわたって様々な手段が用いられ、機根を調える方便が説かれてきたのであります。それに対して法華経は、これまでの方便権経とは異なり、真実の教え、一乗の法が説かれているとおっしゃっております。

次に「^{みなこれ}多宝仏は『皆是真実なり』とて、法華経にかぎりて即身成仏ありとさだめ給へり」とありますが、この多宝仏とは、法華経見宝塔品第十一に説かれるところでありまして、法華経の^{えざ}会座に宝塔に座して出現し、釈尊の説く法華経が真実であることを証明された仏様であります。

宝塔品に説かれるところでは、多宝如来は過去、東方世界の宝浄国の仏でありましたが、菩薩の修行中に、自分が滅度ののち、いずれの地であっても法華経を説く者があれば、その前に^{とうびょう}塔廟を涌現させて、法華経の真実であることを証明しようという誓願を立てたのであります。この誓願のもとに見宝塔品で宝塔を涌現し、塔の中より^{おんじょう}大音声をもって、

「^い釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」（法華経 三三六）と、法華経の真実なることを証明されたのであります。

つまり、法華経が真実であると証明されたことは、その法華経において説かれる即身

成仏義もまた真実であり、しかもこれは、法華經に限って説かれる大事だと仰せられています。

このように、無量義經および法華經方便品ならびに宝塔品にて証明されているように、即身成仏ということは、まさに法華經に限るのであります。

そもそも、即身成仏とは何かと言いますと、衆生が凡夫の身そのままに成ることです。法華經以前の諸經では、例えば悪人の成仏はかないませんでした。悪人が成仏する手立ては、悪人が善人に改まって成仏する、段階的な成仏です。あるいは女人不成仏といって、女性の方も成仏できないとされておりました。女性が成仏するためには、^{へんじょうなんし}変成男子といって、男性に変わらなければならないのであります。このように爾前權經には、その身そのまま成仏することは説かれておらず、^{かいてん}改轉の成仏が説かれているのです。

しかし、法華經に来て初めて、悪人は悪人のまま、女人は女人のまま成仏することが説かれたのであります。また^{りやっこう}歴劫修行といって、何回も何回も生まれ変わり、長い時間をかけて成仏することや、改轉の成仏という、まぎらわしい過程をすべて打ち破って、その身そのまま成仏することができるのであります。

その例証として、提婆達多の成仏と八歳の竜女の成仏が法華經提婆達多品第十二に説かれておりますが、さらに伝教大師は『法華秀句』のなかに、

「^け能化所化俱に^{とも}歴劫無し、妙法の經力を以て即身に成仏す」

と示され、爾前諸經で説かれる歴劫修行に対して、法華經ではまさに妙法の力によって、十界の衆生それぞれがそのまま、当体を改めずして即身成仏すると説かれるのであります。

もちろん、今、末法においては、文底下種の南無妙法蓮華經を至心に信ずることによって、即身成仏ができるのであります。

したがって、次の御文に「^説爾前經にいかやうに成仏ありともと^{ごんしゅう}け、權宗の人々無量にいひくるふとも、たゞ^言ほうろく^狂と^焙ほうろく^焙と^梶千につち一つなるべし。『法華折伏破權門理』とはこれなり」とおっしゃっております。つまり、爾前權經にどのように成仏があると説かれていようが、また爾前權經の人々がどんなに成仏ができると言い張ったとしても、それは千個の^{ほうろく}焙烙、すなわち素焼きの平たい土鍋も、一つの^{かなづち}金槌でたたけばすぐにすべてが割れてしまうように、爾前權經の教えというのは、法華經の強力な力に比べれば、全く相手にならないということでありませぬ。

つまり、爾前權經を依經とした邪義邪宗がいかに多くあったとしても、真実經である法華經の前では、一つの金槌が千個の焙烙を簡単に割るように、すべて打ち砕くことができるのであります。

よって、天台の『法華玄義』には、

「法華折伏破權門理（法華は折伏して權門の理を破す）」（学林版玄義会本下 五〇

二〇)

とおっしゃっているのです。すなわち「法華折伏破権門理」とは、法華の思想そのものが折伏であると示されているのでありまして、我々が信心をしていく上においては、折伏の思想を絶対に忘れてはいけないということでもあります。

それはそうでしょう。折伏を忘れては、自行化他がそろいませんから、そこには功德が具わらないのです。私達が本当に功德を頂こう、本当の幸せを築いていこうと願うならば、あくまでも自行化他の信心をしていかなければなりません。

大聖人様は『三大秘法抄』に、

「正法には天親菩薩・竜樹菩薩（中略）自行計りにして唱へてさて止みぬ。像法には南岳・天台等は（中略）自行の為にして広く化他の為に説かず」（御書 一五九四）とおっしゃっておりますが、一生懸命にお題目を唱えていても功德がないと思うのならば、化他の折伏をしなければならないということです。自行である唱題と、化他である折伏の両方を行じて初めて、功德を頂けるのであります。もしも「私だって一生懸命に信心をやっているのに…」と言う方がいたとすれば、自行と化他という大事な修行を、どこかで忘れてしまっていると思います。この自行と化他ということは、非常に大事なことであります。

さて、大聖人様は『百六箇抄』のなかで、

「日蓮は折伏を本とし 摂受を迹と定む。法華折伏破権門理とは是なり」（同 一七〇〇）

とお示しになっております。御承知のように、人を教化する方法に折伏と摂受がありますが、大聖人様の教えは折伏をもって本とし、折伏を正規とすること、すなわち末法における弘通の方軌は折伏であるということを、はっきりと御教示なされているのであります。

私達の信心から折伏を取ってしまえば、信心は成立しないのです。私達の信心というのは、あくまでも自行化他にわたる信心なのです。ですから、何度も言いますが、いくらお題目を唱えても、功德がないと悩んでいる人は、折伏をすればいいのです。

折伏をすることによって、我々の境界が変わります。そして、境界が変わったその姿が、相手にも無言のうちに伝わるのであります。「この御本尊が第一だ」「多くの人を幸せにしたい」という思いが相手にも伝わる、これが大事なのです。その心を持って折伏に行くのと、いやいややるのとでは全く違います。

ですから、一人ひとりが「自行化他にわたる唱題と折伏に、しっかり励んでもらいたいのです。そのためにも、この『百六箇抄』の「日蓮は折伏を本とし摂受を迹と定む。法華折伏破権門理とは是なり」との御金言を、よく覚えておいていただきたいと思いません。

次に、七番目の『上野殿御返事』の御文について申し上げます。

7 上野殿御返事

とにかくに法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ。殿一人にかぎるべからず。信心をすすめ給ひて、過去の父母等をすく^救わせ給へ。日蓮生まれし時よりいまに一日片時もころやすき事はなし。此の法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり。相かまへて相かま^{あい}へて、自他の生^{しょうじ}死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむか^迎いにまいり候べし。(御書一三六一^号四行目)

この御文は、先に大聖人様御自身が法華經を身読されたことを述べられて、南条時光殿に対しても、信心強盛に法華經の言仰に生きるように勧められている一文であります。

初めに「**とにかくに法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ**」とありますが、この「とにかくに」とは、「色々な事情はさておいて」とか「どのようにあろうとも」「いずれにしても」という意味がありますが、ここでは「どのようなことがあろうとも」という意味と解釈してよいと思います。つまり「どのようなことがあろうとも、法華經すなわち文底下種の妙法蓮華經に己れのすべてを任せ、色心二法にわたって信じきっていきなさい」と仰せなのです。

我々の信心は、御本尊様を絶対的に信じきっていく、いわゆる「無^む疑^ぎ日^{わつ}信^{しん}」の信心が最も肝要です。

この無^む疑^ぎ日^{わつ}信^{しん}、すなわち疑い無きを信^いと曰うとは『法華文句』の御文であり、心に疑惑の無い状態を信^いと曰うとの意であります。ですから、信心とは何かと言え、この無^む疑^ぎ日^{わつ}信^{しん}、御本尊様を疑いなく、素直な心で信じきっていくことであります。

小さいお子さんが、お父さんやお母さんと一緒に南無妙法蓮華經と、無心にお題目を大きな声で唱える姿を見かけますが、この純真な姿が大事です。子供には、南無妙法蓮華經にはいかなる意味があるのかなど、難しい御法門は解らないでしょう。しかし、お父さんやお母さんの教えを受けて、一生懸命にお題目を唱えている純真な姿がありますね。

やはり我々も、この純真な姿というものを忘れてはならないと思います。お子さんに対して「御本尊様は尊い」「御本尊様にしっかりお題目を唱えることが大事である」ということを、お父さん、お母さん方は教えておられると思いますが、そのことを私達はまた再確認して、素直に無^む疑^ぎ日^{わつ}信^{しん}の信心を実践していくことが大事であります。

さて、次に「**殿一人にかぎるべからず。信心をすすめ給ひて、過去の父母等をすく^救わせ給へ**」と仰せです。すなわち、信心はただ自分一人だけにとどめておくのではなく、いまだ信心をしていない人すべてに、正しい信心を勧めていくことが大切です。つまり、自行化他の信心に住していくことが肝要であり、なかんずく、折伏をもって「過去の父

母」など、縁あるすべての人々を救っていかねばならないとおっしゃっているのです。

「過去の父母」とは、よく言われる話ですが、これを尋ねていくと、ものすごく大きな数になるのです。まず私達には両親がいますが、その両親にもまた両親がいるので、四人となります。四の二倍は八で、八の二倍が十六、十六の二倍が三十二、その次が六十四と、どんどん増えていきます。

ちなみに勘定^{かんじょう}してみたところ、十代さかのぼると先祖の数は一千二十四人になります。私達はそれだけ多くの人達の血を受けているのです。さらに二十代までさかのぼっていきまると、百四万八千五百七十六人となるのです。また三十代までさかのぼってみると、なんと十億七千三百七十四万一千八百二十四人という、とんでもない数になります。これは日本の人口を大きく上回りますが、ということは、一人で十億人の先祖の方がいるのであれば、それぞれがルーツをたどっていくと、どこかで交じり合うことになり、結局、どこかで血がつながっていることになります。

ですから、皆さん方の「過去の父母」というのは、御自分だけの父母ではなくして、それこそ世界中のすべての人達に匹敵するぐらいの人が、我々と様々な縁があって、今日、私達があるのです。その故に「自分一人だけに限らないで、多くの方々に信心を勧め、過去の父母等を救っていきなさい」とおっしゃっているのです。

今も申し上げましたが、ざっと三十代さかのぼって勘定しただけでも、十億人の先祖の方がおります。そうであれば、私達の題目一つで、この十徳の先祖の人達に回向できるのであります。それほど御本尊様の力というのは偉大なのです。このことをよく頭に入れて、お題目をしっかりと唱え、そして折伏をしていくことが大事であります。

つまり、世の中のすべての人とは、色々な形で血縁関係にあるのでありますから、一人ひとりを大事にして、縁ある人々を一人でも多く救っていかねばならないということを、是非、忘れないでいただきたいと思います。

次に「日蓮生まれし時よりいまに一日片時も^{かたとき}ころやすき事はなし。此の法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり」とおっしゃっております。まさに大聖人様の御一代を拝しますと、その御一生は妙法広布のための苦闘と苦難の連続であり、「大難四カ度、小難数を知らず」と言われるように、広布のため、また一切衆生救済のために、身を賭^として戦ってこられた歴史でもあるのであります。

法華經勸持品には、釈尊滅後、法華經の行者を種々の形で迫害する、三類の強敵^{ごうてき}があることを説かれております。すなわち、俗衆増上慢・道門増上慢^{せんしょう}・僭聖増上慢の三つであります。

初めの俗衆増上慢とは、法華經の行者を悪口罵詈^{あつくめり}したり刀杖を加えたりする、仏法に無智な在俗の人達のことであります。

次の道門増上慢とは、慢心と邪智に富んだ、邪義邪宗の僧侶達を言います。

三番目の僭聖増上慢とは、外には聖者のように装^{よそお}って、社会的にも尊敬を受けているが、内面では利欲に執着して悪心を抱き、法華經の行者を怨嫉^{おんしつ}して、ついには権力を利用して流罪・死罪にまで迫害を及ぼす敵人を言うのであります。

我々が信心していくと、この三類の強敵に値うのでありますが、三類の強敵に値うこと自体が非常に大事なことであります。逆に、難に値わないような信心をしていてはだめなのです。たしかに折伏をせずに、穏やかな生活をしていれば難に値うことはありません。つまり折伏をし、御法のため、広布のために尽くしていくから、様々な難に値うのであります。

しかるに大聖人様は、

「難来たるを以て安樂と意^{こころ}得べきなり」(御書 一七六三^ぎ)

とお示しになり、自分自身の成仏得道のためには難にあうことが大事であるとおっしゃっているのです。その元は、法を説くという崇高な使命に生きている姿がそこにあるからなのです。

人間として生まれて、なんの思想も持たず、ただ平々凡々と生きていくのか、それとも大聖人様の御意^{ぎよ}に従って妙法広布のために生ききっていくのか、そこには大きな差があります。ですから、我々一人ひとりが目的意識を持って、しっかりとした信心をしていくことを忘れてはならないのです。そのために、大聖人様御自身も「一日片時もこころやすき事はなし」と仰せになり、それは「此の法華經の題目を弘めんと思ふばかり」だからである、とおっしゃっているのであります。

『開目抄』のなかに、

「但^{ただ}日蓮一人これをよめり」(同 五四一^ぎ)

と仰せのように、正法弘通に際にしては三類の強敵による大難があることを説くこの勸持品の偈文^{げもん}を、ただ一人、身口意の三業にわたって読まれた結果、伊豆・伊東の配流、小松原の法難、竜口の法難など、未曾有の大難をお受けになられたのです。しかし、大難を受けながらも、大聖人様は末法の本仏としての境地を開顕あそばされたのであります。まさしくそれは「一日片時もこころやすき事はなし」の連続の御一生であったと言えます。

そして、これは「此の法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり」と仰せられ、一天四海広宣流布達成を願う御本仏の大慈大悲を、ここに示されているのであります。したがって私達も、この御本仏の大慈大悲に対していかにお応えしていくか、今、何をすべきかを、よく考えなければなりません。

近くは明年、日興上人御生誕七百七十年をお迎えいたします。この時に当たって宗門は、法華講員五〇%増の誓願を立てたのであります。今、我々法華講員は、こぞって誓願達成に立ち上がるべきであります。老若男女を問わず、すべての人が立ち上がれば、この誓願は必ず達成できるのであります。

本日は、約四千名の方々が夏期講習会に参加されております。この四千名の方々だけが立ち上がっても、必ず誓願は達成できますよ。要は、一人が立つことです。

本日ここにお集まりいただいたことを機として、是非、師子奮迅の力を発揮し、これからの九ヵ月間を誓願達成の折伏にかけて行っていただきたい。そこからまた、私達の様々なことが変わって今ます。

幸せになろうと思うのなら、その原因を掴まなければだめであります。それはまさに、妙法広布に生きて過去遠々劫の罪障を消滅させ、真の正しい人生を歩むことができる道は、折伏しかありません。

これは両方に言えますが、他人を幸せにできなくて、なぜ自分を幸せにできますか。ですから、自折折他じしゃくしゃくたとも言いますが、自分を折伏して、かつ他人をも折伏するのです。これこそが信心の原点であることを、是非、忘れないでいただきたいと思います。

次に「**相かまへて相かまへて、自他の生死しょうじはしらねども、御臨終ごりんしゅうのきざみ、生死の中間ちゅうかんに、日蓮にっれんかならずむかいにまいり候べし**」とおっしゃっておりますが、この御文を拝すると、御本仏大聖人様の一切衆生救済の大慈大悲のお心を深く感ずることができず。

「自他の生死はしらねども」とは、自分も他人も、いつ死ぬか判らないが、という意味であります。しかし、いずれにしても「御臨終のきざみ、生死の中間」すなわち臨終の瞬間には「日蓮かならずむかいにまいり候べし」と、大聖人様は仰せになっているのであります。ですから、我々はこの御金言を心から信じ奉り、大聖人様の教えに身を賭していかなければならないのです。

このお言葉には、御本仏大聖人様の計り知れない大慈大悲のお心と、一切衆生皆成仏道、つまり妙法を信受した衆生がすべて成仏することを願われる、御本仏大聖人様の限りない絶対平等の慈悲が示されていると拝することができるのであります。

ただし、ここで留意すべきことは、結局は我々の信心であるということです。大聖人様は、

「叶かなひ叶はぬは御信心により候」（同 一五一九）

と仰せであります。

また、皆さんもよく御存じと思いますが、仏道を成就するには、信力・行力・仏力・法力の四つの力が具わらなくてはなりません。つまり、信力・行力とは我々凡夫に具わる力であり、仏力・法力とは御本尊様に具わる力であります。この四力が成就することで何事もかなうのでありますが、既に御本尊様には偉大なる仏力・法力がましますのであります。したがって、そこに我々の信力・行力が具わることで、真の幸せ、即身成仏がかなうのであります。

ですから、御本尊様を信じきって、大聖人様の仰せのままに広布に生きることが、信力・行力を増すことになるのであり、それはお題目を唱え、折伏をしていくことに尽き

るということでもあります。

この「叶ひ叶はぬは御信心により候」の御文を、一人ひとりが絶対に忘れないで、これからもさらに精進していただきたいと思います。

先程も申し上げましたが、来年・平成二十七年の三月までは、あと九ヵ月間あります。これを少ないと思うか、まだまだ時間があると思うかですが、九ヵ月もあれば、たいいていのことは達成できるのではないのでしょうか。したがって、九ヵ月もあるのですから、お題目を唱え、毎日、折伏に歩けば、必ず折伏が成就できると思います。

また、我々の信心姿勢がしっかりしていれば、御本尊様は必ずお守りしてくださるし、諸天善神の加護もあるのであります。ですから、一人ひとりが勇気を振り絞って、九ヵ月間を戦いきってもらいたいと思います。

そして、来年の日興上人御生誕七百七十年の喜ばしき日に、一人ひとりが堂々と胸を張り、登山をしていただきたいと思います。下を向いて来てはだめですよ。上を向いて、大御本尊様に「折伏を達成しました」「精一杯、御奉公させていただきました」と、胸を張って御報告していただきたいと思います。

このことをお願いいたしまして、本日はこれをもって講義を終わります。